



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第16号

発行日 2018年7月1日

発行人 矢代 しづ

秋田市御野塩7-1-29-305

ハリエンジュ

ハリエンジュ*がさわやかな青葉になって
葉叢から初夏の芳香がこぼれてきます
若芽を育み 地下に根を張る
ハリエンジュの力

六月の雨はみどりに降りかかり
蝶形の長い花房は頭をゆらすのです
大粒の雨はやわらいで
葉末からしたたるみどりの雫

陽が空にかがやいてきました
光のふかい呼吸にあわせて
やわらかな青葉がきらめいています

つややかなみどりに身をひたし
高くあかるい空へ伸びあがる
直立する一本のハリエンジュ

*ニセアカシアの別名

濁黒 (KURO) V

*

恐怖に打ちのめされそうなとき

気概の旗をかかげ

山に登る

山の厳しさには

ただ眼前の苦しさに

向き合っていればいい

そのときだけは

濁黒を忘れられる

自然と言葉をかわし

清浄な空気を吸いこむ

道を塞ぐ岩で

動けないままの躰の重心が傾く

カモシカのように駆けあがる孫の

大きな手が

わたしとつながる

(ばあちゃん 頑張れ！)

心に刻印された濁黒に

襲われそうになったとき

耐えきれない恐怖を

振りはらうことはできないか

自分に振りあげた

焦燥の拳を

しずめることはできないか

やすらぎへの渴望は

ひとつの困難を

もうひとつの苦しみと

置きかえることにより満たされる

ドス黒い記憶が押しよせ

わたしの杖は

孫

赤銅色の杖は

わたしを

さ青の空に引きあげる

清澄な空気がみちる頂で

壮大な気宇とつながり

魂を入れかえる

わたしは

ひとりぼっち

ではない

苦しきは

頂に向かつて変容する

神が宿る場所に身をおくとき

萎縮した魂は

喜びをたずさえて

やわらぐ

憩いの場をたたみ

そこから日常を歩きだすと

山では忘れていた

忌まわしい記憶がよみがえる

不意に

濁黒が姿をあらわす

心に刻印された濁黒は

わたしを忘れてはいない

*

労災事故から

どれほどの時が流れても

かけがえのない日常は取り戻せない

心が盗まれたように

笑うことをすっかり忘れていた

後遺症も抑えきれない

*

九年目の冬

突然やってきた

決着

対岸から話すような距離感で

これで終わりとばかりに

わたしを断ち切る

最後の契約

これで

わたしは

どこにも属さない

個となった

*

謝罪は望まない！

わたしにも自負心がある

大事なのは
わたしの真実

どれほどの時が流れようとも
わたしは傷のなかに
恢復する

*

A町からB町へ

漂着したわたしは

少しずつ

生活の領域をひろげていった

はじめて

ひとりで喫茶店に入った

山のもつ心なごませる風味

四隅の壁をとり払った空間を

かけぬけるような香りのコーヒー

ひたむきな足を
まっすぐ前にだして
新たな地平を
みずから開いていくしかない

*

不条理なものと
ともに暮らしはじめた
信じられないほどの年月
精神のやりくりは
なんとか
折り合いをつけた
不意に
不条理な習慣に囚われそうになったら
遠くへ行き
高みから下界を見下ろす

それでも逃れられなかったら
そっと息をひそめて
魂を抱きしめる

*

記憶のなかにしか存在しない
濁黒
身に宿った濁黒と
いつたいどこまで運命をとにもするのだろうか
時折
生々しい光景が
脳裏を襲う
激しい悲しみが
立ちあがる――

*

日の当たらない北側の窓にも

一晩中

つめたい雨がふりかかった

わたしの姿が

水銀色の鏡のなかで

ゆれている

雨がはげしく吹きつけて

ちぢまりかけた

気弱な意志を

ひややかな雨音で

鼓舞する

*

窓のない暗闇で

事故の記憶を

払拭することも

忘却することも

できない

自分で自分の心を

黒くぬりつぶし

ザラザラさせてきた事故

十三年目に

事故に関する資料を

やっとなげけた

見ることも

さわることも

できなかつた

資料を捨てられた

新しい出発点に立った

わたしは

いま

直立する一本の樹木

*

どんなに

胸をえぐられるような苦しみのときでも

感情は魂の壁のなかに隠れていた

わたしの大きな翳が

水面でひすい色にゆれるとき

小さく緩やかな風が流れてくる

苦しみのほよりより

内面の声がひびく

*

本当の暗さを知ってから

夜道が怖くなくなった

労災事故の発端は見えない異臭

証人のいない稀有な事例

不条理が染みだしてくる

地獄の境地

けれど

起き上がる

なんと倒れても起き上がる

わたしは

おきあがりこぼし

*

いままでできなかった
真実の詩

書くことにより

漆黒の記憶が

生々しく呼び覚まされる

なん層にも重なっている記憶の

層と層のあわいから

濁黒は

墨汁のように

闇の糸を垂れる

*

21番！

看守は

わたしを忌まわしい番号で呼ぶ

呼ばれて16年

男は

なめるような目つきで

日に何度も巡視する

独房に収監されている

わたしには

労働も

会話も

許されていない

ただ

紙と鉛筆は

与えられている

堅固な牢の中で

わたしは詩を書く

塀の外の

無限を感じる空を

自由に飛びまわれる鳥を

消灯時間ぎりぎりまで
かつての平穏な生活を思い
詩を積みあげる

*

解く
心のもつれ
つなげる
言葉と言葉
むすぶ
心と言葉
注ぐ
感情と思念を
詩の器に

*

詩を書いていると
たったいま
不幸にあつたばかりのように
かなしみが
こみ上げてくる
塞き止められていた苦痛が
あふれてくる
あれほどの闘病生活の渦中でも
非情な木石のように
泣けなかつたわたしが
感情をむきだしに
泣く
素直に泣ける
積年のかなしみが
あふれて……

*

昨夜

夢を見た

まるで楽土のすがた

幾重にも重なりあつた闇が

はがれ落ちてゆく

ひとつ

またひとつ

*

白い静寂

わたしは体得したひとつをつぶやいて

内面の声をきく

*

あけてはならない!

釘をさす医師

一度あけてしまつたら

元には戻らない

だがどうにもならない

頭も、胸も、脚までもカッと血がたぎり

最後に残つたのは

悲観より希望

もういい!

重い蓋をこじあける

封じこめていた災いが

無数の黒い翳を引き連れて

音もなく飛びだした

①

(おはようございます
挨拶より円札だよ
と、だれかさん

②

両目を開けて
心の目も開けて
四つの目で見てたのに
見えなかった!
明き盲のわたし

③

体がだるい
が
食は快調

④

もうすぐ68歳!
やだな
でも69は好きよ

⑤

女性が
大ト口の刺身を手に取り
少しして棚へ戻した
そして
特売の刺身をカゴの中へ
女性は
御野場へ向かった

【あとがき】

詩は、「誤読」されることがある。まったく思いもよらない感想をいただくことがある。

逆に、読者の思慮の深さに驚き、違う視点にたつた、こんな見方もあったのかと気づかされることもある。

詩は経験で読むものだから、言葉をいかに多角的な視点からとらえるか、詩のもつ背景をよく見て心にとめるか、それにかかっているのではないか。

いま、わたしは問われている。詩をどう表現するか、「濁黒」を書いたあとの自分が……。

*

病後の光の见えない2年間を、14号までに書き終えた。

そんななか、ある人から感想を寄せていただいた。「陰気と深刻であることはちがうわ」という、映画のセリフが書かれていて、「私も見守らせていただきます。」と結んでいた。このことばを宝に、これからも「濁黒」を書きつづけていく。

【ご案内】

第四回「ピッタの会」勉強会

講師に成田豊人氏、田口映氏、十田撓子氏をお迎えし、鼎談を開催いたします。

ご参加をお待ちしております。

日時 九月～十月の予定

時間 午後一時～三時半 無料

場所 あきた文学資料館

申込 希望者は、矢代レイに

ご連絡下さい。

☎ 090・1935・1180

